

「満洲」と「満州」

—ある清朝史研究者の憂鬱—

綿貫 哲郎

0. はじめに

私が中国前近代史の講義などで
「満洲」に言及すると、受講者より「私
の一家は“満洲”引き揚げ者です」と
か「母方の祖父が満鉄で働いていま
した」と言うような挨拶をよくされる。
このように「満洲」と聞けば、近代史
で日本帝国主義が現在の中国東北部に
建てた傀儡国家「満洲国(1932～1945年)」
を思い浮かべる人が多い。

現在では、新聞・報道・辞書類・
書籍・教科書・漫画など多くが「サン

ズイなし」の「満州」^{まんしゅう}と表記するほか、
ワープロ機能までもが「サンズイなし」
に変換候補^{へんかんこうほ}することで拍車^{はくしゃ}を掛けている。
そのため、これが「正しい表記」
と思われている。しかしながら、傀儡
国家「満洲国」の国名^{こくめい}は、正しくは「サ
ンズイ付き」である。この表記は、17
世紀前半^{かくてい}に確定^{まんしゅうご}した満洲語「マンジュ」
の漢字音訳表記^{かんじおんやくひょうき}「満洲」から来ている
のであるが、なぜこのようなことになっ
たのだろうか。

私自身は「サンズイなし」表記の
蔓延^{まんえん}で困惑^{こんわく}する一人の清朝史研究者^{しんちょうし}で
ある。そして「サンズイなし」の「満州」
表記とは、傀儡国家「満洲国」の研究
課題のひとつであり、清朝史とは基本
的に無関係であると考えている。この
件について、本稿で整理してみたい。

1. サンズイ付きの「満洲」

先に書いたように、「満洲」とは満洲語「マンジュ」の漢字音訳表記であり、元来、清朝皇帝こうていによって命名された「民族名みんぞくめいあるいは国家名こっかめい」であった。

16世紀の後半、ヌルハチが建州けんしゅう女真じょしん（女真は女直とも称される）を統合すると、自らの集団みづかの名を「マンジュ」エスニックグループ、「国」くにの名を「マンジュ国」グルンと称した。マンジュ国グルンは海西女真かいせいじょしん（フルン四国）のウラ・ホイファ・エホ・ハダ、さらにはモンゴルと並列して存在し、明朝みんちょうや朝鮮ちょうせんに対しては金国アイシン・グルン（またはアマガ・アイシン・グルン）後金国と称していた。ここで言う「国」グルンとは、「人々のかたまり」を意味しており、近代国家きんだいこっかとは大きく概念がいねんが異なる。さらに、地域名ちいきめいを意味しないことに留意りゅういしておく必要がある。

マンジュの語源は、文殊菩薩（文殊 =
マンジュシリ）とする説が一般的であるが、
「成化三年の役（1467年）」で明朝と朝鮮
の軍に挟撃され殺された建州衛の首長
の李満珠にあやかったと言う説もある。

マンジュに「満洲」という漢字を当
てて確定させたのは、清朝第2代ホン
タイジの1635年のことである。二字と
も（加えて「大清」の国号が）「サンズイ付き」
なのは、漢人思想の五行相克より水徳
をもって「朱明（=朱氏の明朝）」の火徳
を滅するためであるという。1635年以
前は「マンジュ」を漢字音訳表記する
際、「満珠」などは見られるが、それを
除けば「満洲」であった。いずれにせ
よ、確定の以前や以降を問わず「サン
ズイなし」の「満州」は、清朝側（およ
び以降の中華圏）の表記としては全く見ら

れない。

清朝^{いちだい}一代を通じて、「サンズイ付き」および「民族名あるいは国家名」であった「満洲」の名称は、どのような地域名や「サンズイなし」表記に変化していったのであろうか。

2. 地域名としての「満洲」

地域名「Manchuria」とは、現在の中国^{ちゅうごくとうほくぶ}東北部、かつての^{とうさんしょう}東三省という^{ちりくうかん}地理空間を指しているが、満洲語にはこの地域を呼ぶ名称は存在していない。

日本^{にほん}の江戸^{えど}時代^{じだい}、「Manchuria」を^{なが}長らく「韃靼^{だたん}」と呼んできた。「韃靼」とは、中国^{ちゅうごく}唐代^{たうだい}以降にモンゴルを指したものであった。

なかみ たつお

中見立夫（東京外国語大学名誉教授）に

よれば、鎖国^{さこく}日本において、ロシア

より帰国した大黒屋^{だいこくや}光太夫^{こうだゆう}からの聞

き取りをもとに桂川^{かつらがわ}甫周^{ほしゅう}が編纂^{へんさん}した

『北槎^{ほくさ}聞略^{ぶんりやく}』（1794年）に付された地

図「亜細亜^{あじあ}全図^{ぜんず}」（おそらく、光太夫がロ

シアから持ち帰った地図をもとに作製）には、

「民族集団名」としての「満洲」表記

が見られるという。そして、1809年に

高橋^{たかはし}景保^{かげやす}が作製した「日本^{にほん}辺界^{へんかい}略図^{りやくず}」

や同じ高橋の「新訂^{しんてい}万国^{ばんこく}全図^{ぜんず}」（1810年）

において「満洲」が地域名として表記

された。「日本^{にほん}辺界^{へんかい}略図^{りやくず}」は、ドイツ

人シーボルトによって『日本』（1832年）

に^{ほんやく}翻訳・掲載されたが、そこでは「満

洲」は「Mandschurei」、つまり地域名

として^{きじゆつ}記述された。このように、地域

名としての「満洲」は、18世紀末から



日本境界略図

19世紀初頭の間、日本で創作された
としている。

中見は、日本で「満洲」が地域名
として用いられ始めたのは、日本語と
ヨーロッパ諸語の表現法ひょうげんほうの相違そういにある

という。例えば、英語では ^{えいご} 集団 ^{エスニックグループ} としての満洲は「the Manchus」、地域名は「Manchuria」と ^{ごけい} 語形 ^{くべつ} で区別する。ところが、日本語にはそのような ^{ぶんるい} 分類は本来はなく、ヨーロッパ ^{とらい} 渡来の地図にもとづき「満洲人の土地」とあるのを、ただ「満洲」と ^{はしよ} 端折って表記しようとしたために、地域名としての「満洲」が生まれたと考えているのである。

^{にちろせんそう} 日露戦争の結果、^{ちょうせんはんとう} 朝鮮半島と ^{みなみまんしゅう} 「南満洲」は日本の ^{せいりよくけん} 勢力圏に含まれ、1932年になると、^{まつだい} 清朝の末代皇帝溥儀 ^{ふぎ} を ^{ようりつ} 擁立して日本の傀儡国家「満洲国」が ^{けんこく} 建国された。「満洲国」は、^{せんご} 戦後に ^{きゅうまんしゅう} 地域名として「旧満州」と称された。

中国国内でも一時期、^{ちゅうごくきょうさんとう} 中国共産党 ^{まんしゅうしょういんかい} 満洲省委員会のように、例外として地域名の「満洲」の名称が用いられた

ことはあるが、基本的には日本の傀儡
国家は「^{ウェイマン}偽満（または「偽満洲国」）、満
洲族は「満族」と記されるなど、中国
近現代史の中で「満洲」と単独表記す
ることは、^{きょくりょく}極力避けられてきたのであ
る。

このように、地域名としての「満洲」
とは、日本および日本人による^{じゅよう}受容の
問題から生まれ、ほとんど日本人の間
でのみ用いられたのである。

3. 「サンズイなし」の「満州」

戦後、新聞・辞書類より教科書にお
よぶまで「サンズイなし」の「満州」
がデファクトスタンダードになった。
しかも、地域名ではない清朝史の「民
族集団名」までも「満州族」と「サン

ズイなし」で表記されてしまったのである。

その理由として、これまで知られているのは「洲」の略字としての「州」の使用、さらに「洲」が教育漢字ではないことによる「州」の使用などが挙げられてきた。しかしながら、こゆうめいし固有名詞（例：八重洲やえすぐち口や洲すもとし本市など）の表記がこれに該当しないことは、これまで指摘されている通りであり、理由としてもとうていなっとく到底納得できない。

筆者が2008年に某テレビ局の番組を手伝った際、清朝史の集団を「サンズイ付き」の「満洲族」表記にするようようぼう要望したが、受け入れてもらえなかった。筆者以前にも、ある清朝史研究者が、同じテレビ局で同じ要望を出したが、けっきょく結局「サンズイなし」の「満州」

表記であったと聞いている。

そのような「サンズイなし」表記の疑問は、全くの偶然からヒントが得られた。2009年夏、知人らと防衛省市ヶ谷記念館のツアー（通称：市ヶ谷台ツアー）に参加した時のことである。市ヶ谷記念館は、第二次世界大戦後の極東国際軍事裁判法廷（1946～1948年）跡であり、作家のみしまゆきおが割腹自殺をした（1970年）場所でもあるが、ツアーの中で「極東国際軍事裁判用壁掛地図」（1946年当時と同じもの）を眺めていたところ、ツアーの中高生と見られるグループに向かい、会場にいた係員らしき方が解説していた。「歴史の教科書での表記は“満州国”と“サンズイなし”で書くけど、この地図は“サンズイ付き”



極東国際軍事裁判用壁掛地図

です。“サンズイ付き”の“洲”は“くに
= 国”を意味します。“満洲国”は日本
の傀儡“国家”だったけど、実際は中国
の一部だから今は“サンズイなし”
で表記するのです（大意）。

つまり、「サンズイ付き」の「満洲」
表記だと、中国より分離独立した別
な「国家」（= 傀儡国家「満洲国」）という
政治的な意味を大いに含んだ用語とし

て理解していたと言うのである。そのため、戦後は「サンズイなし」の「満州」または「旧満州」と表記することで、中国東北部が杭州や蘇州と同じく中国の一部であると言うことを、日本側が対外アピールしようと考えたためであるというのである。この解説は、一度だけでなく二度（2009年は8月7日と同年9月10日にツアー参加）とも耳にしている。実際は「サンズイなし」の「満州」表記は「誤用」そのものであり、清朝皇帝による命名の歴史は完全に無視されているが、理由としては非常に興味深いものを感じる。外務省や文部科学省は、「サンズイ付き」の有無についても表明していない。いずれにせよ、非公式なかたちではあるが、戦後は中国に対する「配慮」の結果、「サンズイなし」

の「満州」が日本におけるデファクトスタンダードとなったと理解するのがだとう妥当であろう。

ところで、「サンズイなし」の「満州」表記は、戦後にそうさく創作されたと思われがちだが、実は傀儡国家「満洲国」建国以前より存在した。「誤用」が広まったのか「何らかのほうそく法則があった」のかは不明だが、日本人の間でかなり使われていたようだ。一例を挙げれば、満鉄歴史調査室のメンバーが執筆した『満洲歴史地理』第1巻(1913年)の目次には、「漢代の満州」・「三国時代の満州」・「晋代の満州」・「南北朝時代の満州」と「サンズイなし」の「満州」が記されている(ただし本文は全て「サンズイ付き」の「満洲」であるため、この場合は「誤用」とも考えられる)。

これとは別に、筆者自身はみかくにん未確認だ

が、中見立夫によれば、19世紀初頭に
からふと 樺太から沿海州に渡り、黒龍江流域
こくりゅうこうりゅういき
を調査した間宮林蔵の口述記録
まみやりんぞう こうじゅつきろく
『東韃地方紀行』(1810年)において、集
とうだつちほうきこう
団名と地域名、また「満洲」と「満州」
とが混用され使われているという。こ
の指摘は重要であるが、日露戦争後と
の表記の連続性の有無を含めて、結論
れんぞくせい う む
を急がないかたちで、今後明らかにさ
れなければならない。

このように、中国では使われること
のない「サンズイなし」の「満州」表
記は、日本で生まれ、日本人の間だけ
で使われ、戦後日本でデファクトスタ
ンダードとなったのである。

4. おわりに

以上、「満洲」と「満州」の「サンズイ」有無の議論についてまとめた。清朝史で「民族名あるいは国家名」を意味した「サンズイ付き」表記の「満洲」は、日本に伝わり受容される過程で、地域名称と「サンズイなし」表記の「満州」が創作された。日本の傀儡国家が「サンズイ付き」の「満洲国」表記であったにもかかわらず。戦後になると、傀儡国家「満洲国」と断絶する中で「サンズイなし」の「満州」がデファクトスタンダードとなったのである。

1990年代以降、日本の植民地史研究しよくみんちしの進展しんてんにより、新聞や書籍などで「サンズイ付き」表記は増えつつあるが、ワープロ機能変換候補での「サンズイなし」表記などが大きく立ちはだかる

ため、「サンズイ付き」の「満洲」表記は、
まだまだ一般には認知にんちされたとは言え
ないのが現状である。

他方、清朝史研究における表記は、
変わらず「サンズイ付き」の「満洲」
が正しい。まずはこちらだけでも、表
記方法を戻して欲しいと考えるが、教
育現場の混乱が目に見えるようで難し
そうである。

参考文献：

石橋秀雄「ジュシェンとマンジュ」『白山史学』

第30号、1994年

岡本隆司「満洲を「満州」と書く歴史への無知・

鈍感」『週刊東洋経済』2017年9月23日

号

神田信夫「満洲という呼称」『満学五十年』刀

水書房、1992年（原題「満洲の呼称」『歴

史と地理』218号、山川出版社、1973年)

神田信夫「満洲 (manju) 国号考」『清朝史論考』

山川出版社、2005年 (原載、『山本博士還
曆記念東洋史論叢』山川出版社、1972年)

高島俊男「もんじゅマンジュ」『お言葉ですが…』

文春文庫、1999年

中見立夫「歴史のなかの“満洲”像」『満洲と

は何だったのか』藤原書店、2006年

中見立夫「地域概念の政治性」『「満蒙問題」の

歴史的構図』東京大学出版会、2013年 (原
載、『(アジアから考える1) 交錯するアジア』

東京大学出版会、1993年)

細谷良夫「マンジュ・グルンと「満洲国」」『(シ

リーズ世界史への問い8) 歴史のなかの地域』
岩波書店、1990年

松村潤「崇徳の改元と大清の国号について」

『明清史論考』山川出版社、2008年 (原載、
『鎌田博士還曆記念歴史学論叢』同記念会、

1969年)

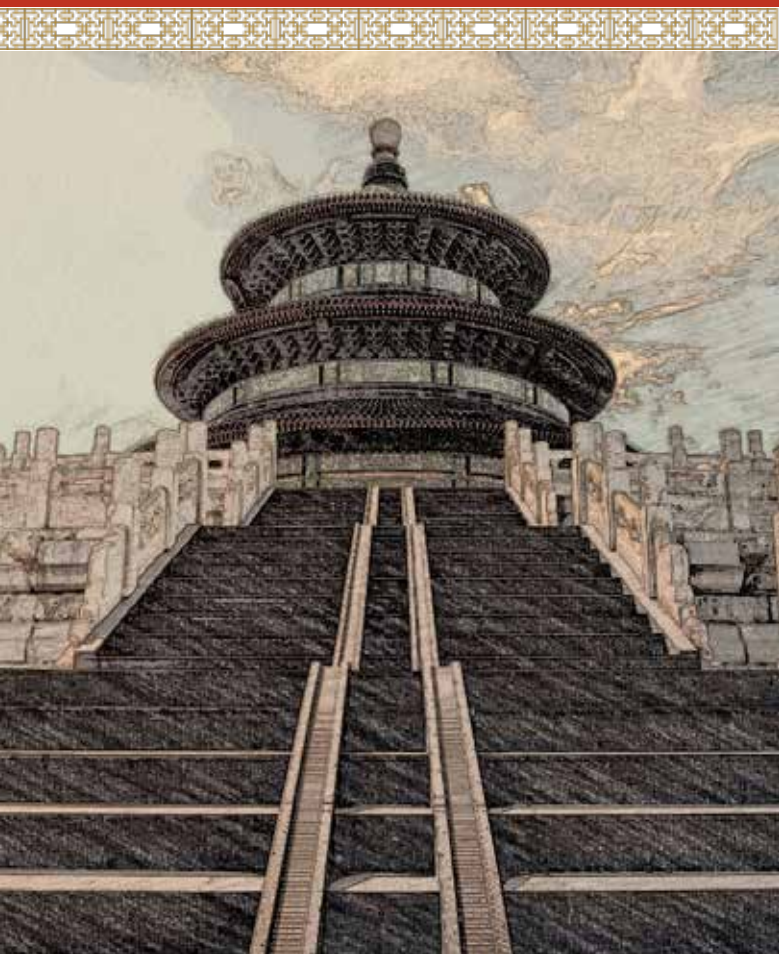
三田村泰助「満珠国成立過程の一考察」『清朝前史の研究』同朋舎、1965年（原載、『東洋史研究』第2巻第2号、1936年）

箭内互等『満洲歴史地理』第1巻、南満洲鉄道株式会社、1913年（国立国会図書館デジタルコレクション→<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/950622>）



中国史史料研究会会報

第 12 号



中国史史料研究会会報 第12号

2021年5月1日発行

編集

中国史史料研究会

hoc@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp/hoc/>

発行・事務局

合同会社 志学社

〒272-0032

千葉県市川市大洲 4-9-2

Tel 047-321-4577 / Fax 047-321-4578

info@shigakusha.jp

<https://shigakusha.jp>

本書の著作権者に無断での複製（コピー・デジタル化など）並びに無断で複製したものの譲渡及び配信する行為については、著作権法上での例外を除いて禁じられています。また、第三者（代行業者など）に依頼して本書を複製する行為は、個人や家庭内での利用を問わず一切認めておりません。